

大学院教育学研究科「教育インターン」活動・指導状況についてのアンケート結果

大学院運営委員会教育インターン小委員会
大 泉 義 一・中 嶋 俊 夫
米 澤 利 明・渡 辺 雅 仁

1. 「教育インターン」の成果を検証するアンケートの方向性
2. M1 学生アンケートにみる「教育インターン」の成果
3. M2 学生アンケートにみる「教育インターン」の成果
4. 教員アンケートにみる「教育インターン」指導状況
5. 「教育インターン」の今後の課題

1. 「教育インターン」の成果を検証するアンケートの方向性

1. 1. はじめに

平成 23 年 4 月にスタートした大学院教育学研究科教育実践専攻（①教育デザインコース、②特別支援・臨床心理コースの2コース）は、平成 25 年 3 月にはじめての修了生を送り出した。平成 24 年度の大学院運営委員会に置かれた「教育インターン小委員会」では、2 年目の「教育インターン」をより円滑に進めるために活動するとともに、新教育学研究科の完成年度にあたり、教育インターンの成果を検証するため M1 学生、M2 学生、そして教員に対してアンケート調査を実施した。本稿はその集計・分析結果を報告するものである。

1. 2. 「教育インターン」の趣旨

アンケートの作成にあたって、小委員会では改めて本教育インターンの趣旨について次の通り確認した。

本学大学院教育学研究科は、実践性を重視し、教育研究の様々なジャンルを活用しつつ、教育現場や社会の現実に対応して変革を提案しうる実践力・創造力を養い、新しい教育のあり方や方法を研究開発していく、すなわち「教育デザイン」できる教員・研究者・専門家の養成を目指している。その教育デザイン力を育成する科目が、1 年次に履修する必修のコア科目「教育デザイン」である。研究科学生は、このコア科目「教育デザイン」における教員の指導、ならびに学校や協力機関の支援の下、教育実践・研究の課題を

持って現場に赴き、実習および調査を行う科目が「教育インターン」である。

1. 3. アンケートにおける「実践性」の位置づけ

本研究科では教育研究の意味を「実践性」という軸で捉え、さらにそれを教育の現場における実践性と「学」そのものの実践性の2つの局面から研究活動の方向を定めた。それは昨今の社会環境の急激な変化や教育をめぐる諸問題の複雑化に対応し、新たな提案につながる研究成果を教育デザインという形に実らせたいと考えたからである。その方向性は同時に、教員・研究者・専門家の養成という目的にもつながっている。そのため学生は、個々の課題意識を現場というフィールドにおいてより確かなものにする必要がある。

この観点から「教育インターン実施計画」（教育デザインノート No.3）⁽¹⁾ において、学生が活動の目的と形態の関連を図れるよう、「実践力スキルアップ」と「調査」の2つのカテゴリーを設定した。

□ 実践力スキルアップ

1. 現場で実践者（主）として活動する
2. 現場での実践者・責任者と共同して活動する
3. 現場で補助的な活動をする

□ 調査（リサーチ、データ収集）

1. 観察
2. インタビュー
3. 現場で補助的な活動をする
4. 実験

5. その他（ ）

1. 4. 6つの項目からみる実践性

教育インターンの趣旨と上記の2つのカテゴリーによる活動目的・形態をふまえて、アンケートでは、教育インターン活動がどのような「実践性」とつながったかを把握することに重点を置いた。具体的には次の6項目から「実践性が得られたか」(M2生)、「実践性に対する学生の変化があったか」(教員)を問いかけた。

- ①授業等における指導力
- ②現場での対応性
- ③現場への視点・理解
- ④研究課題の具体化・研究計画の方向性
- ⑤研究課題に有効なデータや情報
- ⑥新しい教育のあり方や方法の提案

上記の実践性の内容項目の妥当性は、本アンケートの結果(本稿2. 3. 4. 5.)や第1期生の研究実績から、今後さらに検討していかなければならないだろう。

研究テーマにより研究対象により研究方法は千編自在に変化し、ひとつの研究を行うごとに最も説得力のある方法を研究者自身が自ら創造しなければならない。

(秋田・恒吉・佐藤 2005, pp.12-13)

この一文は、長年現場に身を置いてフィールドワークを重ね、実践的研究の重さや難しさ、真の価値を理解している佐藤のメッセージである。本研究科に寄せられる期待は大きく、われわれの創意は道程をスタートしたばかりである。

(文責：中嶋)

2. M1学生アンケートにみる「教育インターン」の成果

2.1. はじめに

ここでは、「教育インターン」活動の成果について、M1学生を対象としたアンケート調査から考察する。教育インターン終了時のM1学生に対するアンケート調査は、平成23年度の教育インターン終了時にも実施しており⁽²⁾、今回の平成24年度におけるM1学生へのアンケート調査の結果と比較しながら考察する。なお、有効な回答数

は、それぞれ平成23年度74、平成24年度65であった。

質問項目については、平成23年度、平成24年度とも次の4項目を共通とした。

- ・ 教育インターンに目的・目標を持って取り組んだか
- ・ 教育インターンに満足しているか
- ・ 教育デザイン研究(修士論文につながるものとして)役だったか
- ・ 実践力を身に付けるのに役立ったか

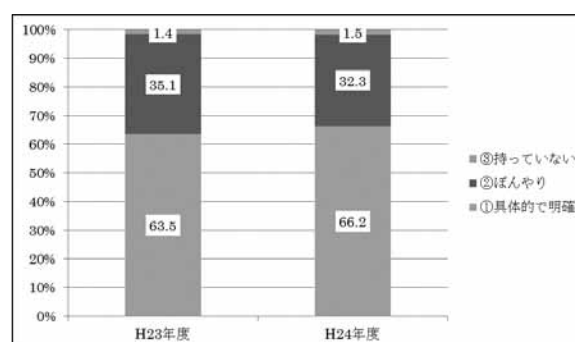
また、平成24年度については、上記4項目にそれぞれの理由を問う下記の4項目を加え、さらに平成23年度のアンケートには載せていなかった前述「1. 2教育インターンの趣旨」を冒頭に加え、アンケート調査を実施した。

- ・ 目的・目標が具体的に明確であった、そうでなかった理由
- ・ 教育インターンに満足している、していない理由
- ・ 教育デザイン研究(修士論文につながるものとして)役だった、役だっていない理由
- ・ 実践力を身に付けるのに役だった、役だっていない理由

2. 2. 教育インターンに目的・目標を持って取り組んだか

まず、教育インターンについて「目的・目標を予めもって取り組んだかどうか」ということについて質問した。結果は表1の通りである。

表1 教育インターンに目的・目標をもって取り組んだか



選択肢	H23	H24
1 具体的で明確だった	47	43
2 ぼんやりとして具体的ではなかった	26	21
3 全く持っていなかった	1	1

設問において、「具体的で明確だった」と回答した者を設問に対して「肯定的に回答」した、のように定義

すると、平成 23 年度、平成 24 年度の結果のいずれも 6 割を超えた程度（23 年度 63.5% 47 名、24 年度 66.2% 43 名）である。本研究科の教育インターンが「教育実践・研究の課題を持って現場に赴き、実習および調査を行う」ことを特色としていることを考慮すると、想定より低い状況であるといわざるを得ない。下記の目標・目的が具体的で明確であった、そうでなかった理由」をみると、やはり修士論文との関係や研究テーマの明確さと関連が深いことが分かる。また、教育インターンの設定されている意義やねらいをよく理解しているかどうかが重要な要素であり、3 割程度の学生の「ぼんやりと」しか明確でない目標・目的をより具体的に明確なものにするためにコア科目「教育デザイン」との関連性を高める必要があることが分かる。

以下は、「目標・目的が具体的で明確だった理由」と「そうでなかった理由」として具体的に記述されたものより、いくつかを抽出したものである：

目標・目的が具体的で明確であった理由（回答数：18）

- ・ 自分なりに問題意識と解明したいテーマを持ってインターンに臨むことができたから。
- ・ 研究対象の状況を把握するという明確な目的があった。
- ・ インターン期間何をやるべきかを明らかにしていたため。
- ・ 担当の教諭との打ち合わせにより具体的な授業実践がイメージできていたため。
- ・ 5 月の集中講義で、自分の理想とする授業のイメージがかなり固まっていたから。
- ・ 私は、現職教員の学生であるため、勤務校での実践によって、研究の成果の検証を行っている。また、自身の授業実践力の向上にもつながっている。そういう意味で、教育インターンの目的・目標は、非常に具体的であり、私の研究・実践に密接に関係するものであったと考えている。
- ・ 修士論文に繋がるものとして有効であった。
- ・ 自分自身の修士論文の内容に大きく関連のあることであったため。
- ・ 実際の教育現場に入ることによって学べるものはとても大きいと感じたため。
- ・ 修士論文につながる内容での授業開発を構想したから。

- ・ 修士論文を書くにおいて、実際の現場を体験することにより、論文の方向性がみえてきた。
- ・ 実際にどのように授業が進められているのか（教科書の使用状況や雑談など含めて）は、行ってみないとわからない。現状に即した教材や内容を考えたかったので、現場を観察することは有意義だったと思う。
- ・ 小学校 3 校にて授業観察をさせていただいたが、視点を明確にして授業をみることができたので。
- ・ 勤務校における授業において「ピアレビューによるライティング指導」を実施した。始める前に十分な時間があり、また生徒たちの様子もよく把握していたので展開は難しくはなかった。しかしながら、ライティングをさせる十分な時間を確保するために、通常のプロジェクトの時間を削らなくてはならず、そうした点の難しさは今後の自分の課題となり大変役立ったと思う。
- ・ 自分の修士論文のテーマにそのままつながるものであったため。
- ・ 目的を絞って参加したため。
- ・ 研究テーマが明確であるからだと思う。

そうでなかった理由（回答数：10）

- ・ 修士論文に対しての明確なビジョンが不足していた時期にインターン内容を決定し無ければならなかったため、インターンとデザインの連携が多少不明確な感じがしていたため。
- ・ 途中で研究が修正されるなど、インターンを生かし切れない。
- ・ 実践経験をして、目的意識によってその意義は大きく変わる。教育デザインにおける自分自身の目的意識を探しながら、教育インターンを実践していたといったほうが正しいという印象だった。目的・目標が事前にありそれを実践する場が教育インターンという機会ではなく、実践の中から自分自身の目的・目標を具体化する場が教育インターンであったという点で、目的・目標はぼんやりしていたといえる。
- ・ （一般的な）インターンが（実践的な）教育デザイン力の養成に寄与することは理解できるが、今回のように 1 年次前半にインターンの目的、活動場所などを設定して 1 年次後半に行う、また 30 時間程度の短い臨床経験が教育デザイン力の養成に寄与す

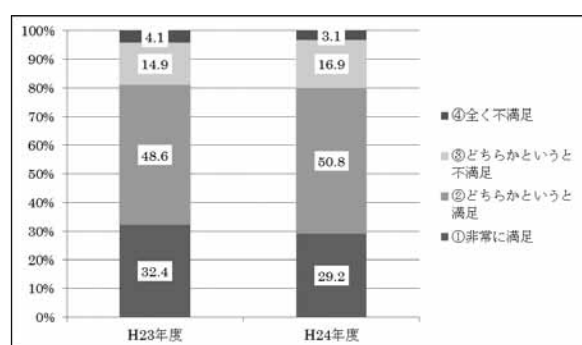
るとは到底考えられない。むしろインターンのためのインターンにしかになっていないと思われるため。

- 前例も少なく、具体的な活動をイメージするのが難しかった。授業自体に「なんとなく」のイメージしか持つことができず、「必修だから仕方なく強引にこなした」感じになってしまったと感じている。「このような研究テーマを持っている学生はこのようなインターン活動をおこない、研究にこのように結びつけました」等の参考事例があると、具体的にイメージしやすくなるのではないかと思う。
- 具体的にどの能力を育成するために教育インターンを実施しているかは、はっきり分かっていなかった。
- その目的は授業のやり方などの教育方法を学ぶためなのか、自分の研究を進むための実践調査なのか、それとも他のものなのかは明確していなかった。
- 自分の研究テーマはまだ決めていなかったのので、研究のために教育インターンで研究方向をみつけて、目標と目的ではないと思って、見つけたら、目標と目的あると思います。
- 教育インターンは自分の研究あるいは論文を書くには役に立ちますが、これからの進路について、役に立つとは十分に言えないです。

2.3. 教育インターンに満足しているか

次に、教育インターンについて「満足しているかどうか」ということについて質問した。結果は表2の通りである

表2 教育インターンに満足しているか



回答	H23	H24
1 非常に満足	24	19
2 どちらかという満足	36	33
3 どちらかという不満足	11	11
4 全く不満足	3	2

設問において、「非常に満足している」もしくは「どちらかという満足している」と回答した者を設問に対して「肯定的に回答」した、のように定義すると、平成23年度、

平成24年度の結果のいずれも8割程度であり、満足度はおおむね高いといえる。また、満足している点も実践力が高まったことや修士論文に関連づけることができた等多岐にわたっている。満足していない点は、時間がとられたことなどである。

以下は、「満足している理由」と「満足していない理由」として具体的に記述されたものより、いくつかを抽出したものである：

満足している理由 (回答数:30)

- 自分自身が専攻する教科単元について、全計画を立案し、授業実践を行うことができたため。
- 数多くの授業を観て比べることで、今後自分が授業を行う際の注意点などを考える機会が増え、学びが非常に多かったから。
- 日々実践であるが、教育インターンとしての位置づけがあったために、一つの区切りとしての検証ができた。
- ここでしか得られない経験があり、今後役に立つことは間違いのないため。
- 実際に教育現場に入ることができ、実体験として教育実践の難しさ、奥深さを学ぶことができたから。
- 教育デザイン研究の問題意識の明確化に影響を与えることができたから。
- 修士論文や教育デザイン研究に少しでも関係のある形となった。また、目的以外での教育実践上でのさまざまな気づきが得られたから。
- 指導教官との打ち合わせを重ねながら、意義深い授業開発を行えた。
- 現役の小学校教員だが、現場を一步離れて授業をみるのができたのがよかった。
- 大局的に自分の実践も振り返りながら、修論のテーマにそって授業をみるのができたのでよかった。
- 実際に養育棟に入らせてもらうことで児童の生活の実際を知ることができたため。
- 目的を達成でき、新たな知見を得ることにつながったため。
- 教育インターンの目標の一部を達成したからだと思う。
- いろいろなことを経験したり、新しい知識や支援方法などを知られたりして、満足しました。
- 自分のできる時間帯に授業を行うことができた。また、自分のクラスであることから、児童理解もでき

- ており、それを生かして授業を進めることができた。
- 毎時間の学習指導案を作成したり、使用する教材を開発・作成したりして、主体的にインターンに取り組み、授業実践力を高めることができたため。
 - 修士論文を構想することにおいて、実際の現場を体験することにより、論文の方向性がみえてきた。
 - 実際にどのように授業が進められているのか（教科書の使用状況や雑談など含めて）は、行ってみないとわからない。現状に即した教材や内容を考えたかったので、現場を観察することは有意義だったと思う。
 - 小学校3校にて授業観察をさせていただいたが、視点を明確にして授業をみることができたので。
 - また生徒たちの様子もよく把握していたので展開は難しくはなかった。しかしながら、ライティングをさせる十分な時間を確保するために、通常のプロジェクトの時間を削らなくてはならず、そうした点の難しさは今後の自分の課題となり大変役立ったと思う。
 - 教育インターンを通して、今日の大学工学部における実験・実習の授業実態を把握できました。
 - 自分の考えた構想を実践し、反省点があった場合、他のクラスを使って、修正した内容でさらに実践することができた。その中で、問題点やよさについて考えを深めることができた。

満足していない理由（回答数：5）

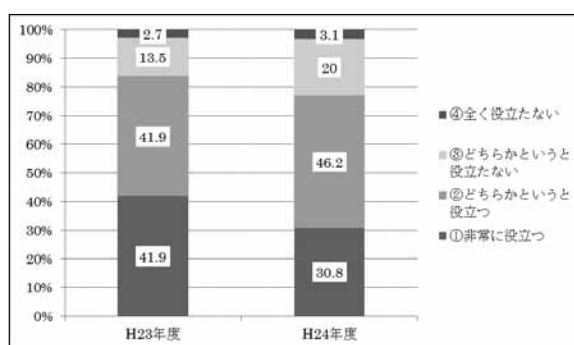
- 自分の目的と実施先担当者の考える目的とを一致させるのに話し合うなどの時間を要した。
- インターン自体は非常に有意義であったが、デザインとの関連を考えると多少疑問が残るため。
- 課程の異なる現場に身を置き発見があった。しかし現職であるため申請・承認の手続きで各所に迷惑をかけてしまった。
- 教育インターンの実施により自分の予想通りの結果が得られると思っていたが、必ずしもそうではなかった。それこそが自分の知るべきことだったと思う。最初からうまくいくものではない。今後工夫が必要であることを、改めて認識した。
- インターン先での仕事におわれ、文献を読んだりする時間が少なくなってしまった。教員になったときに経験できることを院生という立場でやることになってしまった。しかし、研究と実践の往還は大切

なので現場を経験することにもためにはなると思う。結局はどちらがいいのかはわからない。

2.4. 教育デザイン研究（修士論文につながるものとして）に役立ったか

次に、教育インターンについて「教育デザイン研究に役立っているかどうか」ということについて質問した。結果は表3の通りである

表3 教育デザイン研究に役立っているか



回答	H23	H24
1 非常に役立っている	31	20
2 どちらかという役立つ	31	30
3 どちらかという役立つたない	10	13
4 全く役立つたない	2	2

設問において、「非常に役だっている」もしくは「どちらかという役立つ」 という「肯定的に回答」したものは、平成23年度が8割を超えているのに対して、平成24年度は8割以下になっている。特に、「非常に役に立っている」ものは、「平成23年度→平成24年度」が「41.9%（31名）→30.8%（20名）」と減少している。以下は、「役立っている理由」と「役立っていない理由」として具体的に記述されたものより、いくつかを抽出したものである：

役立っている理由（回答数：22）

- インターン先との関係を構築する手掛かりとなった。
- 1クラスの児童を1年間継続的に見ることによって、その表現力ののびはどこに由来するのかを見つけることができたこともあった。児童理解ができた上での、実践は有意義であった。
- 自分の考える論理が、実際の現場においてこどもたちにどう受けとめられるかを見ることができた。
- 直接的に役立つものではなかったが、修士論文研究に取り組むモチベーションにつながるものがあ

たため。

- アンケートやビデオ記録などデータ収集ができた。
- 教育インターンを通して修論のテーマが決まったから。
- 一つの区切りとしてのミニ研究になったと考えている。したがって、これから取り組む修士論文の基礎になるものが見えてきた。
- 実際の現場で見たり学んだことは、書籍や伝聞では賄いきれないものであると感じるため。
- 教育インターンを通して、研究における問題意識が教育現場での現状を踏まえた上での具体的な視点となったため。
- インターンと修士論文は直接関係はなかったが、調査方法の基礎的な知識の習得や、調査方法の練習という意味では役にたったと思われる。
- 修士論文とインターンのテーマが一致していたから。
- 具体的にどの部分に役立つのかはわからないが、M1の段階で修論を意識して活動できたのはよかったと思うので。
- 今回の教育インターンから得られた結果は自分の予想と少し食い違う点が見られた。そこで起きた諸問題は即座に解決されるものではなく、今後時間をかけて根気よく指導を継続する必要があると気づいた。新年度、新学年の新しい指導のスタートとして、修士論文につながる大きなステップであったと考える。
- これまでも授業を行う現場は持っていたが、教育インターンの実習であると意識したことで、目的が明確になった。
- 修士論文に直接つながらなくても実践の経験と考えればよい、という気持ちもある。
- 何人かの学習者と接触ができて、自分の研究の調査対象になってくれた。
- 教育インターンが範囲を限り、自分の教育デザイン、あるいは修士論文に対して、一部分を参考できると思うが、他の参考文献、研究に関する本も必要重要であり、インターンの結果は全部採用ではなく、代表性があることを役に立つがあると思う。
- 従来の大学工学部における実践教育を検討するには、今日の大学工学部における実践教育を知らないといけませんので、今回の教育インターンは修論に役立った。
- 教育インターンの成果を前提として修論を進めてい

くので。

- 現場の人とのつながりが作れたこと。
- 教育インターンの実施内容は修士論文につながっているからだと思う。
- 役に立つと思っています。

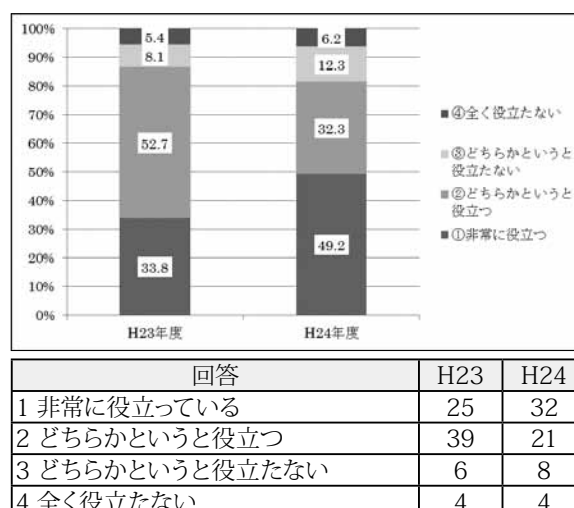
役だっていない理由(回答数:6)

- 修士論文に対しての研究よりもインターンの計画が先行してしまい、多少計画に無理があったため。
- インターンは、修士論文とは関係のないものがテーマとなっているため。
- 自分の研究内容的には現場経験をすることは役立つと思う。しかし、問題なのはその経験を今やるべきなのかということだと思う。
- 当初の修士論文の計画に迷いが生じていて、つながらないかもしれない、という気持ちがあったため。
- 研究テーマとは違うものだった。
- インターン開始から終了の間に修士論文の研究計画に大幅な変更が生じたため。

2.5. 教育インターンは実践力を身に付けるのに役立ったか

次に、教育インターンについて「実践力を身に付けるのに役立っているかどうか」ということについて質問した。結果は表4の通りである。

表4 実践力を身に付けるのに役だっているか



設問において、「非常に役立っている」もしくは「どちらかというと役立っている」という「肯定的に回答」したものは、平成23年度および平成24年度とも8割を超えおり、概ね良好な状況といえよう。特に、「非常に役

に立っている」については「平成 23 年度→平成 24 年度」が「33.8% (25 名) → 49.2% (32 名)」と大きく増加している。前項の「教育デザイン研究に役立ったか」という質問と関連づけて考えると、平成 24 年度は、より実践力を身に付けるインターンとして機能したことが推測される。

以下は、「役立っている理由」と「役立っていない理由」として具体的に記述されたものより、いくつかを抽出したものである：

役立っている理由 (回答数 :18)

- 1つの単元の指導案作成から教材研究、授業実践に至るまで、力を入れて行うことができたため。
- インターンという事で、実際に現場に出て経験できたことは実践力という事を考えると非常に有意義でした。
- 違う現場を見ることはよい刺激になる。
- 学部時代よりも学校現場を見る回数が明らかに増えたから。
- 授業は、自身で実践しなければ、その力は自身のものにはならないと私は考える。教育学研究科で理論を学び、研究していることを、自身で実践することには、大変大きな価値があると思う。
- 実際に仕事を任せられ全うすることができたため、実践力は身に付いたはずである。
- これまでに実際に学校現場で活動をしたことがなかった私にとって、学校を通して教育実践の場でインターンを行うことができ、現場における実践の仕方、実践を通じた今後の課題の発見、改善が必要な点についての試行錯誤を経験することができたから。
- 私は現職教員であるが、今までの自分の授業スタイルにはない形の授業開発がおこなえたから。
- 実践力を目的として行わなかったため。インターンにて実践は行っていないが、実践する際に考えるべきことなどは今回考えることができたと思う。
- 今回の教育インターンとしての活動はもちろんこれで終了ではなく、この活動を繰り返し得られるものを追求してより良い結果に到達できるのではないかと考える。一人だけでは手さぐり状態であった自分を、指導教員の先生は具体的な指標を示して方向づけて下さり、非常に大きな助けになった。

- 毎回授業を考え、実践したので役立った。
- 実際に授業に参加して、中上級の学習者に対して、どういうふうにその能力を引き出すのか、また、授業の事前準備や進み方などを知ることができた。
- 学習の実践力が育つだけでなく、いろいろなことを身につけたと思った。
- 学生たちと直接コミュニケーションし、その要望、感想を聞くなど、観察調査とヒアリング調査に関する経験を得ました。
- 実際に子どもたちへ指導しながら反応を確かめることができたから。
- 教育インターンを通して、教育現場の事情がよく分かるようになったからだと思う。

役立っていない理由 (回答数 : 7)

- 恐らく学校を対象として必修科目に設定されているのであろうが、学校外の各種機関の場合、インターンは通常実務体験であり、実践力を身につけるものとは捉えられない。今回のインターンでも、このインターンはどのようなものか説明しても、インターン先は戸惑っていた。必修科目となると、単位のために来ているのだろう、という先入観を与えることにもつながり、実践力形成にはマイナスに働くと考ええる。
- すでにフィールドでの実践経験があり、それを元に研究を始めていることから、教育インターンは実践力形成に役立ったと言うよりも、関係性構築のために手伝いに行ったという意味合いが強かった。
- 学生にはよいかもしれないが、現場経験者にとって実践力を付けるほどのものではない。
- 新たな気づきをえられるという点では有意義であったが、実践上の新たなスキルを得られたとは考えられない。費用対効果を考えた場合、ほかの方法も検討すべきである。
- 現役の小学校教員のため、このインターンで実践力をつけるという視点はなかったのだ。
- 既に教育機関で仕事をしていたため、インターンでの取り組みは普段の実践とあまり変わらずにできてしまうので、非常に役立ったとまではいえない。
- インターン生は「お客様」という感覚が相手側にあったと感じたため。
- 教育インターンの時間は少し短いと感じていて、も

うちちょっと時間を長くしたほうがいいと思っています。

2.6. M1学生アンケートのまとめ

平成23年度および平成24年度のM1学生へのアンケートから改組・改編された新大学院教育学研究科に導入された新たな科目「教育インターン」が、「実践的な研究」を進めていくことやそれぞれの現場に即した実践力を身に付けることについて相当程度役立っており、その結果として概ね満足できる状況にあることがわかった。

しかし、また、平成23年度および平成24年度のM1学生へのアンケートのいずれからも明らかのように、教育インターンの成果を高めるためには、高度な専門性と実践性をもって、研究への取り組む力の向上を目指すコア科目「教育デザイン」の授業との連動は欠かせないこともわかった。

教育インターンのねらいである「教育現場や社会の現実に対応して変革を提案しうる実践力・創造力を養い、新しい教育のあり方や方法を研究開発していく教員・研究者・専門家の養成」を実現するためには、それぞれの学生の教育デザイン研究と教育インターンをより綿密に連動させ、学生の教育インターンに取り組む目標・目的をより具体的に明確させていく必要がある。そのためには、個々の授業の充実だけでなく、教育学研究科全体として教育インターンの充実に取り組んでいく必要があるだろう

(文責：米澤)

3. M2学生アンケートにみる「教育インターン」の成果

3.1はじめに

M2学生に対するアンケートは修士論文の作成が完了している時点における、「教育インターン」活動の成果を検証する目的で、2012年12月から修士論文の提出日である2013年1月21日まで実施された。有効な回答数は62であった。

科目の全般的な実施状況や学生の捉え方については、すでにM1終了時にアンケートをしているので、今回は、科目の持つ「実践性」に焦点を当てて調査を行った。

3.2「教育インターン」と実践性

今回のアンケートでは、その冒頭に前述「1.2. 教育インターンの趣旨」を載せ、科目の趣旨説明を記述した。

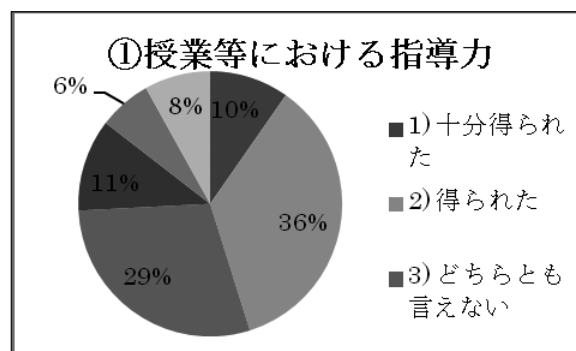
この記述は前年度、M1学生であった際のアンケートには記述されていなかったものである：

この趣旨の理解について、全体の4分の3、75.8% (47名) のM2学生が、1) 十分理解していた、もしくは、2) 理解していた、のように肯定的に回答している。

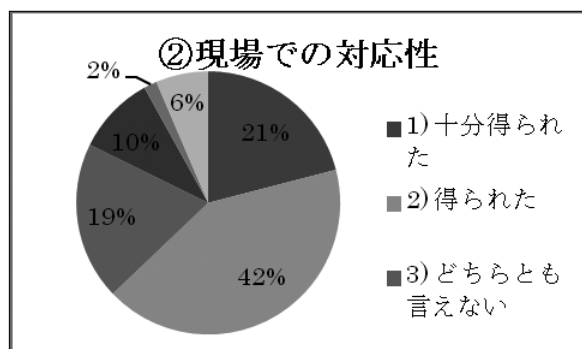
趣旨説明は、「教育インターン」を「実践性」を重視する新教育学研究科において、「実践力・創造力」の養成を目的として「実習および調査」を実施する科目として定義している。しかし、「教育インターン」の活動目的を問う質問に対しては、1) 授業等における指導力、のように回答した者は、30.6%であり(19名)、2) 調査(リサーチ、データ収集)、と回答した82.3%(51名)に比べて半分以下の割合に留まっている。これは、学生が教育関連現場に赴いて行う「実習および調査」の中で、現状では「調査」がより重要な意義を持っていることを表している。

「実践性」については、79.2%(46名)が1) 十分理解が得られた、もしくは、2) 得られた、のように肯定的に回答している。「実践性」の具体的な内容として、① 授業等における指導力、② 現場での対応性、③ 現場への視点・理解、④ 研究課題の具体化・研究計画の方向性、⑤ 研究課題に有効なデータや情報、⑥ 新しい教育のあり方や方法の提案、という6つの項目について調査した。以下はその結果を円グラフ化したものである：

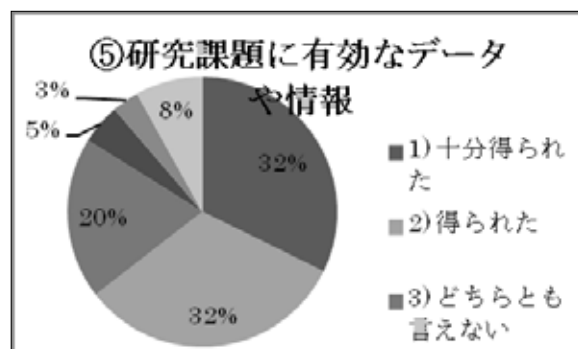
教育インターンにおける実践性



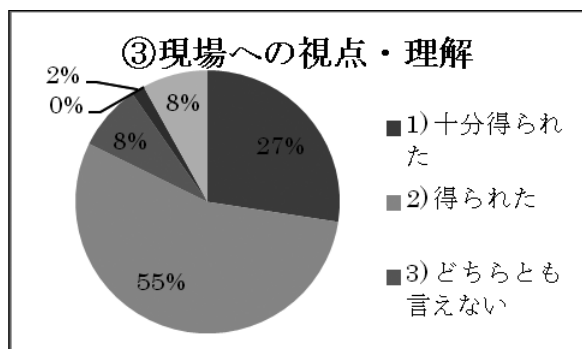
回答	回答数
1) 十分得られた	6
2) 得られた	22
3) どちらとも言えない	18
4) あまり得られなかった	7
5) 得られなかった	4
回答なし	5



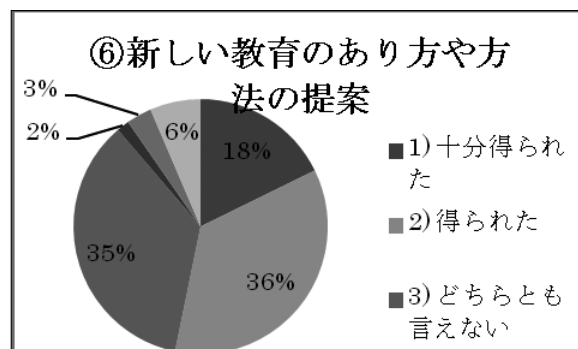
回答	回答数
1) 十分得られた	13
2) 得られた	26
3) どちらとも言えない	12
4) あまり得られなかった	6
5) 得られなかった	1
回答なし	4



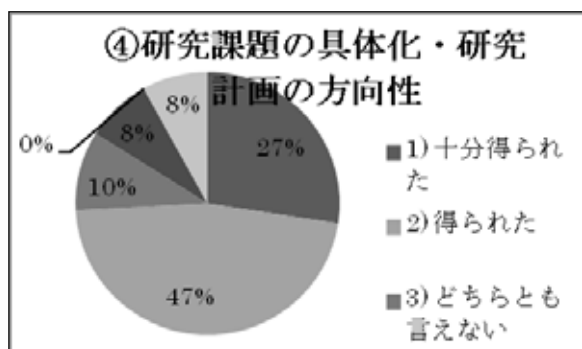
回答	回答数
1) 十分得られた	20
2) 得られた	20
3) どちらとも言えない	12
4) あまり得られなかった	3
5) 得られなかった	2
回答なし	5



回答	回答数
1) 十分得られた	17
2) 得られた	34
3) どちらとも言えない	5
4) あまり得られなかった	1
5) 得られなかった	0
回答なし	5



回答	回答数
1) 十分得られた	11
2) 得られた	22
3) どちらとも言えない	22
4) あまり得られなかった	1
5) 得られなかった	2
回答なし	4



回答	回答数
1) 十分得られた	17
2) 得られた	29
3) どちらとも言えない	6
4) あまり得られなかった	5
5) 得られなかった	0
回答なし	5

設問において、1) 十分得られた、もしくは 2) 得られた、と回答した者を設問に対して「肯定的に回答」した、のよう
に定義すると、以下の順序で、肯定的に回答した割合が低くなる：

M2生による実践性の理解

設問	肯定的回答
③現場への視点・理解	82.3%, 51
④研究課題の具体化・研究計画の方向性	74.2%, 46
⑤研究課題に有効なデータや情報	64.5%, 40
②現場での対応性	62.9%, 39
⑥新しい教育のあり方や方法の提案	53.2%, 33
①授業等における指導力	45.2%, 28

上の数値より明らかなように、学生の考える「実践性」とは、教育現場に自ら赴いて得られる、授業観察に関

連する項目であり、⑥新しい教育のあり方や方法の提案、①授業等における指導力、といった、学生がより主体的に教育現場に関わることから得られる項目については、割合が低くなっている。

以下は、「実践性が得られた理由」と「実践性が得られなかった理由」として具体的に記述されたものより、いくつかを抽出したものである：

実践性が得られた理由（回答数：22）

- ・ 以前は現場への理解が不十分であったが、活動を通して現場を経験したことにより、実際の感覚としてある程度の自信をもって授業を行えるようになった。
- ・ 授業実践の際に生徒に実験をさせたが、実際にやってみないと気付かない危険性があった。また、生徒が実験・観察するときの着眼点がこちらが予想してなかったものもあり、新鮮だった。こういった学びが新しい実践につながるのだということを感じた。
- ・ 実際に教育が行われている現場に入ること、話を伺うことや観察から学ぶことができたため。
- ・ 授業力の高い教員とともに授業開発を行い、その中で教員としての在り方や授業での教師の役割などについて多くのことを学ぶことができたから。
- ・ とっさの判断が必要な場面が多く（主に生徒指導等）、その場その場でどう対応するのが最も良いか考える機会が多かったため、現場での対応性が良く身に付いたように感じている。
- ・ 現職教員として、勤務先での学習活動の実践を行ったが、指導教員の先生の意見をいただきながら、授業の構成や教材についてもよく検討したり、違った視点で考える機会が持てた。また、子どもたちの振り返りやアンケート調査の傾向を授業に反映し、その後の授業に生かすことができた。
- ・ 生徒が防災についてどんな意識をもっているのかを、肌で感じる事ができたから。
- ・ 実際に一つの単元の授業を参観して、カリキュラム構成について学ぶことができた。また、子どもの実態とそれに応じた教師の支援が見え、授業を考えるうえで参考になった。
- ・ 通常自分が勤務している学校と違う形態の学校でのインターンだったので、自分の欠点、足りないところがわかり、また視野がとても広がった。違う学

校の教師と話ができたのも大変勉強になった。

- ・ 研究に役立てるという意味では、多くのものを得ることができたと思う。やはり机上の空論ではなく実際に見ることができたからであると考えられる。
- ・ 美術館や市民ギャラリーという社会教育施設で、スタッフとして施設の利用者に関わることで、今までとは異なった視点を得ることができたため。また、スタッフの考えに触れることで、改めて美術館やギャラリーの存在意義について考える機会を得ることができたため。
- ・ 附属鎌倉小学校の6年生を引率し、野外活動、共同生活のプログラムを行った。危険と隣り合わせであり、一緒に生活をするということで、リスクマネジメントと指示など、子供への対応力と経験を得ることができた。
- ・ 私はそもそも教育に携わることがなかったものだが、教育インターンを通じ、自身が学んできたことを職場で（医療系の多職種の人々、医師、看護師、薬剤師、栄養士、社会福祉士等に）伝える機会を持つことができた。この教育インターンは、自分の思考過程を理解していない人に対し、どのようにすれば理解してもらえるのかを熟慮する良い機会であったと思う。オーディエンスとなる人々のニーズを把握した上で、そこで伝わりやすい言葉や表現とは何かを考えることができるようになった。

実践性が得られなかった理由（回答数：4）

- ・ 結果的にうまく予定が合わないまま調整をしたため見たい内容が見られなかった。
- ・ 実践性を得るためというよりも、修士論文のデータを集めるための場となった。
- ・ 授業実践を行ったわけではないから。実践性を得るということに関しては、方法によると思う。
- ・ そもそも、修士論文がフィールドワーク研究ではなかったため。

「実践性が得られた」とする記述中より、学生が、現場の経験豊かな教員から、授業について学んでいることが伺える。現職教員によると思われる記述においても、コア科目「教育デザイン」の指導教員の指導によって、通常の勤務では得られない体験が報告されている。「実践性が得られなかった」とする記述の多くは、「教育インターン」を授業実践の場として捉えていないことが理

由となっている。

3.3「教育インターン」と修士論文作成

また、「教育インターン」の活動と修士論文の作成については、全体の66.1% (41名) が、1) 十分役立っている、もしくは2) 役立っている、のような肯定的な回答をしている。さらに、修士論文中に「教育インターン」が占める割合について、パーセンテージで回答を求めたところ、平均:32.9%、中央値:30%、最小値:0%、最大値:80%となった(回答数41名)。平均や中央値が30%近辺であることを考えると、単に、「教育インターン」の実施のみでは、修士論文の完成にはどうも至らないことが推察できる。

3.4「教育インターン」活動の改善に向けて

今後、「教育インターン」活動を充実させるために、この活動の充実度の向上に貢献した要素を調査した。学生には①大学からの趣旨説明(シラバスやオリエンテーションでの説明)、②大学での手続きや連絡、③大学での指導体制、④インターン先の条件、⑤インターン先担当者の対応・指導、⑥活動時間や回数、⑦自分のモチベーション・意欲、⑧自分の実践力、といった8つの項目について、1) 活動の充実度につながった、2) つながらなかった、不満だった、3) どちらでもない、のいずれかを回答してもらった。1) および2) と回答した割合について、高い順番に並べると以下ようになる:

1) 活動の充実度につながった

項目	1) の回答
⑤インターン先担当者の対応・指導	85.5%, 53
⑦自分のモチベーション・意欲	83.8%, 52
④インターン先の条件	75.8%, 47
⑥活動時間や回数	70.9%, 44
③大学での指導体制	53.2%, 33
⑧自分の実践力	50.0%, 30
②大学での手続きや連絡	37.1%, 23
①大学からの趣旨説明(シラバスやオリエンテーションでの説明)	32.2%, 20

2) つながらなかった、不満だった

項目	2) の回答
①大学からの趣旨説明(シラバスやオリエンテーションでの説明)	33.9%, 21
②大学での手続きや連絡	30.6%, 19
③大学での指導体制	25.8%, 16
⑧自分の実践力	12.9%, 8
④インターン先の条件	11.3%, 7
⑥活動時間や回数	9.7%, 6

⑦自分のモチベーション・意欲	8.1%, 5
⑤インターン先担当者の対応・指導	3.2%, 2

1) の回答の割合が高い、上位4つの項目のうち、⑦と⑥は学生個人の「教育インターン」活動の計画に関連している。また、④と⑤は受け入れ先との連携に関連している。活動をより良いものとするには、活動を開始する前に、学生が個人的な準備を積み重ね、受け入れ先との密接な連携が必要となる。また、学生がことに不十分であると感じている1) の回答の割合が高い項目、①、②、③はいずれも大学サイドの指導や手続きに関連している。活動の円滑な実施に向け、大学の体制も強化しなければならない。

3.4.1 学生の取り組み

「教育インターン」の充実に向けた学生の取り組みについて以下のような記述が見られた:

あなたが「教育インターン」の活動を行った際に工夫した点、良かった点について聞かせてください。

(回答数:14)

- ・ 指導教員の先生にご協力いただいて、海外でインターンを行えたことは非常に有意義であった。現地でつながりを持ち、その後日本においても電子メールでのやり取りで資料を提供していただくことができた。
- ・ 生徒が理解しやすいと感じられるような教材の提示。生徒同士のディスカッションによる相互理解。
- ・ 他の教員とのコミュニケーションを密にして対応に当たった。
- ・ 例年行う授業とは違う授業構成、実習例で実践した。事前と事後にアンケート調査を行い、子どもの意識・行動の変容を見ることができた。
- ・ 学生だからこそできることを考えて、ゼミの仲間とともに活動したこと。
- ・ 担当教員と、試行錯誤しながら計画を立てた。特に、修士論文執筆に活かすことを第一に考えた。
- ・ 実践のことだけを重視せず、そこで知り合った教師とも積極的に話しかけ、視野を広げられた。
- ・ アクションリサーチ的な形で、実践現場に良い刺激となるような参加をこころがけた。
- ・ 言われたことだけをやるのではないこと。教育に関して自分が教育したい内容を明確にし、それがオーディエンスに対し、自分が思うように伝わったかどうか分かる指標を立案したこと

3.4.2 受け入れ先との連携

また、受け入れ先となった教育関連機関からは、次のような要望があった：

あなたや大学に対して「教育インターン」の活動先から意見や要望がありましたか。憶えている範囲で聞かせてください。(回答数：12)

- 現場の教師として、現場に要求される(子どもの「やる気」を引き出すことができる教師など) ことができるような学生を養成してほしいと言われた。
- 「大学院生にしかできない授業」をしてくださいとリクエストがあった。
- 私自身と現場の両者にとって Win-Win の関係であるような活動形態にしてほしい、との話があった。
- 現職という立場で勤務先でインターンをさせていたため、事前の書類や記録簿(校長印など)、対応者などに関して職場側の対応に困っていたようでした。学校が直接対応するものか、教育委員会なのかという点で確認を受けたような気がします。
- 結局は自力でインターン先を見つけなければならなかったのが本当に大変だった。一か所は断られ、その理由は自分の学校にとってメリットがないものをどうして受け入れなければならないのか、大学側からの説明が不十分という理由だった。

「教育インターン」の実施初年度であっただけに、学生と受け入れ先の双方に混乱があったことが伺える。また、受け入れ先によっては、先進的な教育活動の提供を期待しているケースもあった。

3.4.3 大学への要望

大学への要望として、次のような記述が見られた：

今後「教育インターン」の活動をより良いものにするために意見や要望、提案したいことがあれば聞かせてください。(回答数：11)

- 提出物の提出時期等の連絡で、時折分かりづらいうことがあった。情報は出来るだけ早く、分かりやすく、かつ正確なものを提供していただくと有難いです。また、提出先が学務なのか、教育デザインセンターなのかで混乱することがあったので、来年以降受講する学生のためにも、その明瞭化もお願いしたいと思います。
- 社会人学生が教育インターン活動に参加する場合

のハードルは高いです。活動時間や回数などの諸条件を厳正にクリアしようすると、教育インターン活動そのものを免除してほしいという意見も解らなくもない。もちろん、活動のイメージや目安となる活動量を示すことは必要だと思いますが、これをあまり厳正に捉えると、かえって実践性や創造性を妨げます。コア科目の「教育デザイン」もそうですが、教育インターン活動そのものを学生自身がデザインするという視点も必要であり、これを免除してほしいという意見が出てしまうのは非常に「もったいない」ことであると思います。コア科目「教育デザイン」の具体的内容は、研究領域によって様々であると思いますが、双方の科目の関連性の最も重要な点は、教育をデザインする以前にこうしたフィールドや活動を(学生自身が)デザインするところから始めることであり、教育インターンの最も大きな意義ではないかと思います。

- 教員志望でない者にとってはフィールドの設定が難しい。学校以外でもインターンができることなどを今後は説明してほしい。
- インターンはとても良い経験になることは確かだが、このようなシステムを設けるのであれば、もう少し大学側がインターン先を斡旋するなどのシステムを整えてほしいと思った。インターン先を見つけるのにとても時間と労力を費やした。
- 提出書類の締め切り時期の度重なる変更をしない、書類提出先を明確にする、記載すべき内容(活動内容)を明確にする、免除申請の有無を明確にする、インターン先の自己開拓の困難さを援助する、学生への情報伝達(掲示板含め)をきちんと行う、評価の基準を示す。

3.5 M2学生アンケートのまとめ

修士論文の作成が終わったM2学生のアンケートより、新教育学研究科の「目玉」とも言える「教育インターン」は、学生に相応な満足を与えている。しかし、「実践性」という点では、主体的な授業の企画や運営ではなく、受け入れ先の教育機関における観察や調査といった第三者的な関わりが中心となっている。修士論文作成についても、「教員インターン」活動は相応の貢献を果たしているものの、この活動だけでは修士論文を完成させるには不十分である。今後、「教育インターン」活動

をさらに充実させるためには、1) 学生の事前準備、2) 受け入れ先教育機関との綿密な連携、3) 大学サイドの指導、といったことがらにおいて、知識、経験を積み重ね、共有を進め、よりよい形に改善していく努力が求められている。

(文責：渡辺)

4. 教員アンケートにみる「教育インターン」指導状況

4.1 はじめに

本稿は、教育学研究科教員に対して行った教育インターンに関するアンケート調査(『「教育インターン」に関するアンケート調査ご協力のおかげ』2013年1月30日回収)の回答結果から今後の学生指導に対して示唆となると思われる事項を抽出し、その結果を報告するものである。当該調査は、下記項目に関する質問紙調査の形式で行われた。有効な回答数は83であった。

1. 「教育インターン」趣旨の理解についてお答えください。
2. 昨年度(平成23年度)と今年度(平成24年度)の「教育インターン」担当学生の人数をお答えください。
3. 「教育インターン」の活動先の決定にあたってどの程度関与しましたか。
4. 「教育インターン」の活動内容を担当学生の「教育デザイン」と関連付けて指導することができましたか(できていますか)。またその理由がありましたらお聞かせください。
5. 「教育インターン」の活動期間中に学生をどのように指導しましたか(していますか)。インターン先担当者との連絡、指導体制等についてお聞かせください。
- 6 - 1. 「教育インターン」の活動を取り入れたことで、実践性に対する学生の変化(効果)がありましたか(ありますか)。
- 6 - 2. 変化があった(ある)場合、それは具体的に以下のどのような項目についてでしたか。(複数回答可)「授業等における指導力」、「現場での対応性」、「現場への視点・理解」、「研究課題の具体化・研究計画の方向性」、「研究課題に有効なデータや情報」、「新しい教育のあり方や方法の提案」、「その他(具体的に記入)」
7. 学生の「教育インターン」の活動と修士論文を関連付けることができましたか。またその理由がありましたらお聞かせください。
8. 昨年度と今年度2年間の「教育インターン」のご指

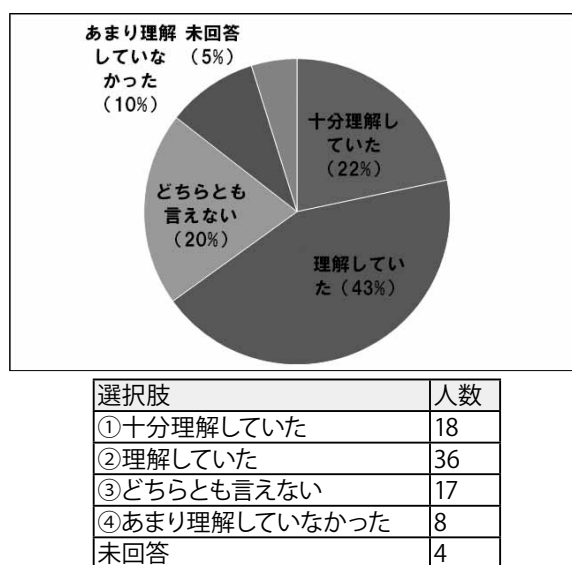
導を通して工夫されている点、今後に向けてのご提案などがありましたらお聞かせください。

以上の項目のうち、本報告では1, 3, 5, 6, 7, 8の項目の回答について、その概要を挙げ、学生指導に関する要点を述べる。

4.2 趣旨の理解について

教育インターンの趣旨に対する教員の理解状況は、表1の通りである。65%が「十分理解していた」「理解していた」としているが、そもそも教育活動とは「十分理解していた」上で行われるべきものであるため、決して高い水準にあるとは言えない状況であると言える。

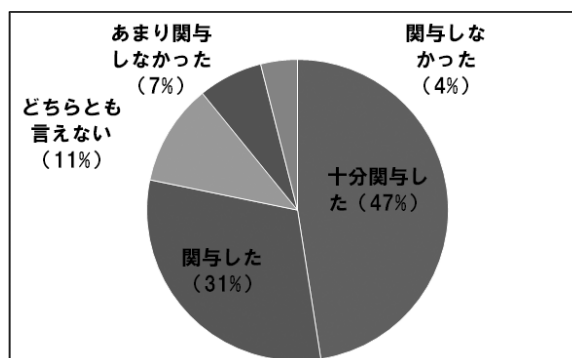
表1「教育インターン」趣旨の理解について



4.3 活動先の決定に対する関与

学生の活動先を決定するにあたり、教員がどの程度関与したかについて、M2生に関しては表2の通りである。これによると、約8割の教員が何らかの形で決定に関与していたことがわかる。

表2「教育インターン」活動先の決定に対する関与



選択肢	人数
①十分関与した	48
②関与した	31
③どちらとも言えない	11
④あまり関与しなかった	7
⑤全く関与しなかった	4

4.4 活動期間中のインターン先担当者との連絡・指導体制等

それでは、活動期間中においては、どのような指導を行っていたのであろうか。この設問に対する回答群は大きく次のように分類することができる。すなわち「インターン先との連携」、「学生指導」、「運用・運営」である。以下に各カテゴリーの主な回答を列挙する。なお全回答数は62であった。

○主にインターン先との連携・協同に関すること

- ・ インターン担当者とは、2～3回打合せ(電話を含む)を行った。インターン生と共に、インターン開始前に学校へ行き、管理職と顔合わせをした。
- ・ インターン先が研究協力校でもあり、学生に同行することも多く、適宜、連絡調整ができた。教育長、学校長の理解が大きい。
- ・ CSTの専任教員と協力して行なっている。
- ・ M2は期間前後のみで、活動期間中は先方にお任せした。
- ・ M1生(今年度)の場合、活動期間中に頻繁に連絡を取り、活動状況を把握した。特に1名の活動は、インターン先の指導者と連携しながら活動の充実を図ることができた。
- ・ 小学校教諭との協働に基づき、指導教員、小学校教諭、大学院生のトロイカ形式でのコミュニケーションを重視した。併行して、児童とのコミュニケーション、それぞれの計3本を統合した。
- ・ 活動先を韓国に設定しているため、具体的には院生が主体的にインターン先担当者との連絡を行っている。活動内容への指導は行っている。

○主に学生指導に関すること

- ・ 研究会が教育インターンの場合であるため学問的指導の場として機能した。
- ・ 引率。私自身が研修、公開授業などに関わりを持っている学校である。
- ・ 定期的にゼミをひらき、報告させ、得た知見と修論

との関連性を必ず考えさせた。

- ・ たとえば、教育実践などを行った場合、事前指導、事後指導を行ったら、実践を分析する手段などについて指導した。
- ・ 研究室などでインターンの前後、また、途中において話し合いの場などを設けた。
- ・ 教育インターンの出先へともに出向き、そこでの一連のプロセスに参加。
- ・ 基本的に事前・事後指導に重きを置き、問題や質問等があれば、期間中に連絡しあうことにしている。
- ・ 現職教員の場合：アクション・リサーチの手法で本人の勤務先でもある学校へ授業参観に出向き、ビデオ録画をした。大学で授業をふり返り、授業改善へとつなげる指導をした。
- ・ 現場の有様をしっかりと観察して問題点と可能性の両方を明確にとらえることを指導した。
- ・ 海外(マレーシア)の実際に赴いて補助した。
- ・ インターン先でのカリキュラムがあらかじめ存在しているので、学生からその内容を聞きながら方向付けをしている。
- ・ 礼節、フィールドエントリーの作法、モラル。
- ・ 学生から相談があれば対応した。

○主に運営・運用について

- ・ インターン先での指導は講座内担当教員に一括して任せている。大学での振り返り指導を行っている。
- ・ 研究内容に対応できるかどうかで考え始めたが、実際のところは附属を活用するところに落ち着いた。
- ・ M1については現職教員で教育インターンの活動の実施にはいろいろ制限があり、むずかしい部分があった。

以上の回答は一部であるが、各教員が学生個々の状況に応じて様々に工夫した連絡体制の構築を行い指導にあたっていることがわかる。必ずしも有効な方策ばかりではない、これらいわゆる「実践知」は、蓄積され共有されることを通して、よりよい方策を生み出す契機となるであろう。

4.5 実践性に対する学生の変化(効果)

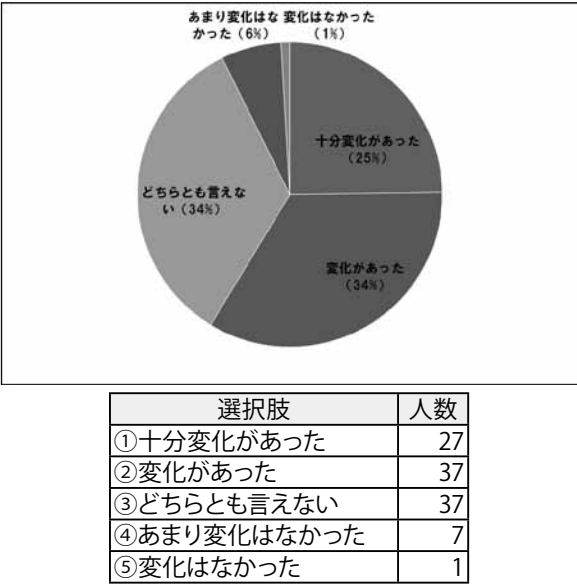
「教育インターン」の活動を通じた学生の「実践性」の変化(効果)に関する回答結果は、M2生に関しては

表3, M1生に関しては表4の通りである。M2生では「十分変化があった」、「変化があった」とする肯定的な回答が7割近くであるのに対して、M1生では6割弱にとどまっている。またM2生, M1生ともに「どちらともいえない」、「あまり変化はない」、「変化がない」とする留保的あるいは否定的な回答の割合がそれぞれ約3割、約4割あり、変化(効果)に対して実感を持ち得ていないことがわかる

表3 実践性に対する学生の変化(効果): M2生

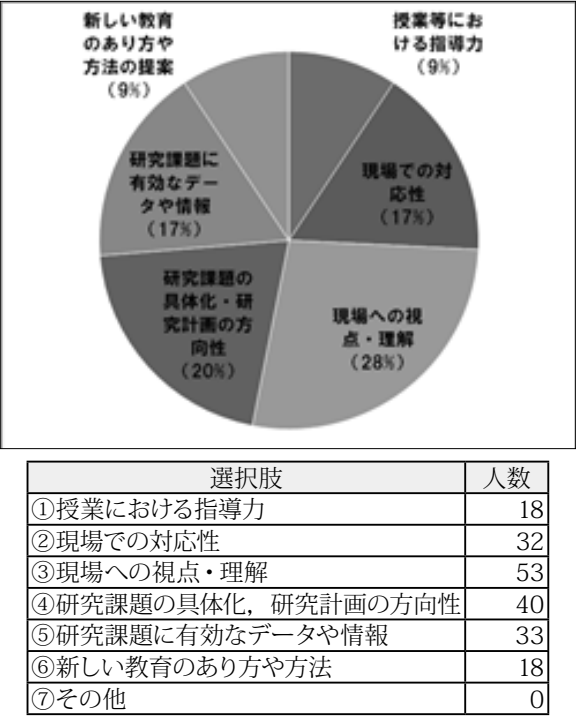


表4 実践性に対する学生の変化(効果): M1生



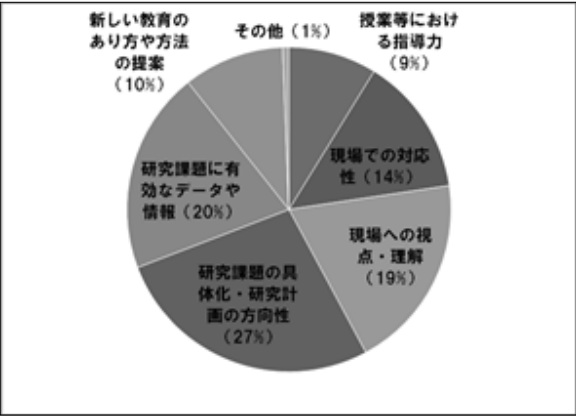
4. 6 実践性に対する学生の変化(効果)の内容

表5 実践性に対する学生の変化(効果)M2生



実践性に対する学生の変化(効果)に関して「十分変化があった」、「変化があった」と回答した教員のうち、その変化(効果)の具体的な内容について、指定された項目、すなわち「授業等における指導力」、「現場での対応性」、「現場への視点・理解」、「研究課題の具体化・研究計画の方向性」、「研究課題に有効なデータや情報」、「新しい教育のあり方や方法の提案」、「その他(記述)」から選択し回答している結果は、M2生については表5、M1生については表6の通りである。

表6 実践性に対する学生の変化(効果): M1生



選択肢	人数
①授業等における指導力	14
②現場での対応性	22
③現場への視点・理解	31
④研究課題の具体化，研究計画の方向性	43
⑤研究課題に有効なデータや情報	32
⑥新しい教育のあり方や方法	16
⑦その他	1

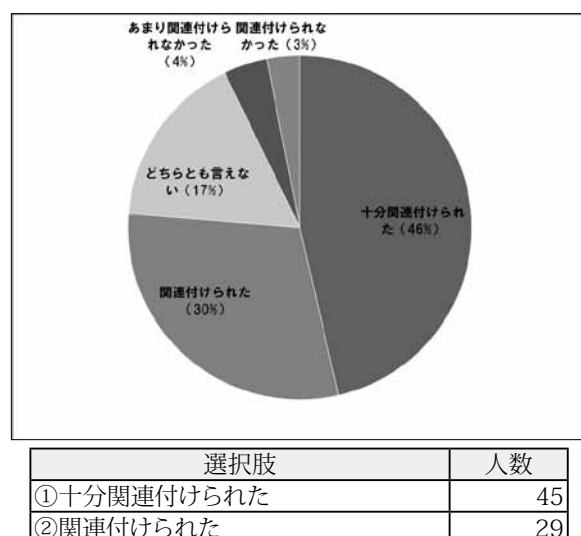
(複数回答可) なお「その他」については回答者無しであった。

M2生に見られた変化(効果)では、「現場への視点・理解」が最も多く、M1生では「研究課題の具体化・研究計画の方向性」が最も多かった。次いで多かったのは、M2生、M1生ともに先述2つの回答に加え「現場での対応性」、「研究課題に有効なデータや情報」であり、「授業等における指導力」「新しい教育のあり方や方法の提案」がそれに続いた。この回答状況からは、教育インターンで得られる変化としては、実践者としてよりも研究者としての視点に基づく変化が顕著であったということがわかる。

4.7 教育インターンと修士論文の関連付け

M2生の指導において、教育インターンの活動と修士論文を関連付けることができているか否かに対する回答状況は、表7の通りである。「十分関連付けられた」「関連付けられた」とする回答が76%と8割近くを占めていることがわかる。一方で2割を超える教員が、それらの関連付けに対して否定的な考えをもっていることもわかる。

表7 教育インターンと修士論文の関連付け(M2生)



③どちらとも言えない	16
④あまり関連づけられなかった	4
⑤関連づけられなかった	3

以下は、肯定的・否定的な考えに対する理由を分類し、それぞれの一部を列挙したものである。なお、全回答数は肯定的な回答は38、否定的な回答は11であった。

【関連付けることができた場合の理由】

●教育インターン先を修士論文研究のテーマとの関連において決定

- ・ 研究課題と密接なインターン先を選択したので。
- ・ 修論テーマとの関連でインターンを行ったため。
- ・ 当初より修士論文研究テーマと連動したインターンと位置付けて計画・実施したため。またこのことは留学生指導である場合は必須であると思われる。

●修士論文研究に教育インターンを直接的に活用

- ・ それぞれの修論のデータの一部はインターン活動で集めたものである。
- ・ 修士論文の研究内容をインターン先の化学クラブ等で紹介したり、インターン先の生徒の様子・反応を修論の研究に生かした。
- ・ インターン先の子どもを抽出児としたから。

●教育インターンにおける修士論文研究に対する知見の獲得

- ・ 実践の中で研究課題を見出し、それを基に研究計画を立て、実践を行うことができた。
- ・ 課題を明らかにし、解決の方策を考える等の修士論文を書く上で基本的なスキルを身につけることに非常に役立った。
- ・ 修士論文のテーマは直接「教育インターン」に関したものではないが、修士論文に関する研究を遂行するに当たって、参考となる経験を得ることができた。

【関連付けることできなかった場合の理由】

●修士論文研究のテーマ設定

- ・ 本人の意向で教育インターンは「高校の技術教育」について、修士論文では「木材と人の関係」について行うと当初より決めていたため、研究活動は並行して行ったため。
- ・ 修士論文のテーマに直結することが困難であったため。
- ・ 本人が本当に研究したかった内容と学校現場の教

育課題にギャップがあったため（そもそも関連づけられる修論のテーマではなかった）

- ・ 基礎的・学術的テーマを学生が希望していた。

●研究手法の問題

- ・ 教育インターンの活動自体はとても意味のあるものであったが、その内容が（を）修士論文としての研究主題にするためには、教育に関する研究手法が不足していた。

以上のように、関連付けの方法や内容は、大きく次の三つに分類することができる。一つ目は「教育インターン先を修士論文研究のテーマとの関連において決定」というケースである。これは入学当初から指導学生の研究計画書に沿って教育インターンを計画していくことを意味している。当然、今後において本教育学研究科を志望する学生も、教育インターンとの関連を念頭に入れて研究計画を構想してくることが予想されるので、教員がこうした指導を想定することは必須であると思われる。二つ目は「修士論文研究に教育インターンを直接的に活用」というケースである。これは第一に挙げたケースが、教育インターンを修士論文研究との関連においてあらかじめ設定しているのに対して、修士論文研究の進捗に伴って必要性が浮上してきた教育現場における実証的データの収集など、修士論文研究のために教育インターンを活用するというケースである。三つ目は教育インターンにおける修士論文研究に対する知見の獲得」というケースである。これは教育インターンを実践研究を行う場として機能させることや、修士論文研究の課題を教育実践という視点から俯瞰する機会としての意味をもつことを示している。

また逆に関連付けることができなかった理由としては、修士論文研究の研究課題が、そもそも教育現場（教育実践）と直接的に関連をもたないケースが挙げられている。この場合においては、上述したような研究課題の俯瞰あるいは別の角度からの検討の機会として教育インターンを活用する可能性もあると考えられる。

4.8 指導の工夫・提案

最後に『昨年度と今年度2年間の「教育インターン」のご指導を通して工夫されている点、今後に向けてのご提案などがありましたらお聞かせください。』という設問に対する自由記述による回答のうち、具体的な内容が

記されているものを列挙する。全回答数は33であった。（ ）内は、回答者の所属講座である。

- ・ コア科目「教育デザイン」とよく連動させるようにしている。また、事前の計画で修士論文とよく関連させるように指導した。（臨床教育）
- ・ 教育インターンの時間があまりに少なく、現場(学校)からは「もっと長時間、定期的に来てATのように手伝ってほしい」との声があった。短期集中ではなく、長期に学校に入ることで見える課題もあるのではないか。長期にインターンを行う際の授業のあり方など考えていけるとよいと思う。（臨床教育）
- ・ 今回のアンケートを見る限り、教員になることのみを前提とされている様なので、教育学の専門的知識を積んだ上で、公務員(教員以外)や企業スタッフを輩出しているという状況を踏まえて、「教育実践専攻」のあり方を幅のあるものとして考えてほしい。（教育学）
- ・ 現職教員のインターンは選択制にしてもいいのではないのでしょうか。（教育学）
- ・ 学部生も同行できる機会をねらいたい。学年を超えた交流で、視点、ふりかえりが深まり、多面的にもなる。（教育学）
- ・ 基礎研究や理論研究を疎かにしない指導を！実践が重要なのは言うまでもありませんが、実践を強調するあまり「実践」という言葉を甘い言葉として受け止め、勉強しない学生が増えている印象があり、残念に思っています。（心理）
- ・ 今年初めての試みであったため、来年度は小学校との連携をより緊密にしたい。（日本語）
- ・ モデルを示す。（日本語）
- ・ 現場の理解を促すとともに、実地体験を通して現在の問題点などが把握できるように努めた。（国語）
- ・ M2: 教育インターン先指導教員、学生、それにわたしの三者で話し合う、ということは実現できなかった。（国語）
- ・ M1: 1名については上述のことが実現できた。やはり、大学教員がインターン先に行くことが大切であろう。（国語）
- ・ データを取り、研究発表としての修論作成に前進させている。（国語）
- ・ 教科としての「倫理」については高校での実習が望まれる。光陵他との連携を活かしたい。（社会）

- ・「教育インターン」の実施状況については、指導される先生、院生の研究への関心意欲によってかなりの違いがあると思う。臨床的な視点、質的研究の方法による研究を進める院生、教師としての実践的指導力を高めることを希望する院生にとってはよい試みである。しかし、そうでない院生にとっては形式的になる可能性がある。全員が同じ形でこの「教育インターン」を進めるのではなく、いくつかのバリエーションがあった方がよいと思う。(数学)
- ・研究協力校において「協同的な学び」を軸とする算数授業づくりを研究している。このテーマとの関連で M1、M2 の学生が修論に取り組めるよう指導した。(数学)
- ・CST の専任教員と協力して行うことにより、細かな指導ができた。ただ、来年度以降の CST の体制が未定であり、先行き不透明です。(理科)
- ・昨年度先方に事前伺いをした時点で示せる資料が少なく苦労した。先方での好意により教育インターンが実現できた部分が大きかった。特に新規で行う場合のフォローは必要かと思います。(技術)
- ・実践する前に教材なり、開発プログラムなりをみこみをつけて用意し、担当学生だけではなく研究室のメンバー全員で支えるようにする。(家政)
- ・現職教員の院生を受け持つことが多いのだが、授業研究を修論テーマとしている場合はアクション・リサーチによる取り組みが教育デザインにつながるので指導しやすい。ただその場合、「教育インターン」に行った際の認め印を誰が押すのかを考えると、所属長(校長)からというのも不自然に思える。「教育インターン」実施の書類について現職教員対応用のフォーマットを別途考えていただければ幸いである。(家政)
- ・修士論文の計画を根本的に見直す必要性に本人が気付くことができた。これを乗り越えられるよう指導することが大切と考えている。(家政)
- ・教員のネットワークを使って、海外、インターナショナルスクールなど未知の領域へ導いた。(音楽)
- ・もう少し内容が公開される工夫する(web サイトで動画を含め)(音楽)
- ・それなりの金銭的補助を充実させる。(音楽)
- ・先方の受入れ態勢(ソフト・ハードの両面)と学生の研究内容をどのように調和させるかが難しい。(美

術)

- ・学生と教諭、学生と大学教員の関係だけでなく、教諭と大学教員との間に共有できる専門性や共通理解、コミュニケーションが必要。(美術)
- ・活動内容が多岐に渡るため、指導力が問われる。その解決策としては、教員のネットワークづくり(協力指導教員)も必要に思う。(体育)

これらの意見は、いずれも「教育インターン」という教育活動を実践する中から浮上してきた実感的かつ具体的な意見であり、ここから今後のあり方を議論していくことが重要であろう。

(文責：大泉)

5.「教育インターン」の今後の課題

本研究科の大幅な改組・再編は、大学院における教員養成改革の重要なポイントとして、従来のアカデミック中心の学びだけでなく、実践と理論の往還を含む多様な学びへと学びのスタイルを変換することをねらいとした。その具現化のために、ワークショップ形式を取り入れたコア科目「教育デザイン(Educational Design)」とそれに関連させた実習活動を中心とした必修科目「教育インターン(Field Internship and Research in Education)」というこれまでにない二つのユニークな授業が特色あるカリキュラムとして導入された。繰り返しになるが、まさにこの二つの授業が本研究科の「目玉」であり、その成果が本研究科改組・再編の意義に直結している。今回のアンケート調査は、教育インターンの終了した時点での M1 学生のみならず修士論文を作成した M2 学生、指導教員までを対象として実施したものであり、その実態を相当程度明らかにできたといえよう。その分析結果の詳細は、2. 3. 4 の項に記載されているとおりであるが、M1 学生、M2 学生にとってはある程度満足度の高い、また指導教員にとっても学生の成長を実感できるものとなっており、実践と理論の往還を含む多様な学びというねらいは、ほぼ期待通り実現できているといえるだろう。

しかし、まだ課題も多い。最後に教育インターンの今後の課題について次の二つに触れておきたい。

まず第 1 の課題は、学生の事前準備にかかわっての「教育デザイン」と「教育インターン」の二つの授業の連動性をさらに深めるという課題である。「教育デザイ

ン」の授業の目的は、「学校教員・研究職・教育関連職他としてのデザイン力の形成をめざす。各自の研究課題に関わって、現代社会を見据え、近未来社会の諸問題と深く関わった『教育デザイン』を構想し実現するための、基礎的な取り組みをする。教育インターンでの実地検証を経た上で、修士論文へとつなげる」ことである。そのために授業展開は、

1. オリエンテーション
2. 「研究計画」の構想
- 3～4. 教育インターンのフィールド設定
5. 「研究計画」の提出
- 6～15. 教育インターンの方法・時期の決定
- 16～18. 教育デザインの検討
19. 教育デザインフォーラム秋季大会（ホームカミングデザイン内）への参加
20. フォーラム関連のレポート
- 21～29. 教育デザインの検討
30. 最終レポート、「経過報告」の提出

が想定されている。教育インターンの成果を高めるためには、並行して高度な専門性と実践性をもった研究への取り組みを目指す「教育デザイン」の授業とのより一層の連動は欠かせない。

第2は、教育インターン受け入れ先機関、施設等との連携をさらに綿密にするという課題である。もちろん、附属学校5校（附属小学校2校、附属中学校2校、附属特別支援学校1校）については、当初より教育インターンについて協働を進めている。また、地域の公立学校及び教育委員会等教育機関との連携協力については、神奈川県教育委員会だけでなく、政令指定都市の横浜市教育委員会、川崎市教育委員会、相模原市教育委員会、中核市の横須賀市教育委員会との間で本研究科長と各教育長により「横浜国立大学大学院教育学研究科と教育委員会との教育インターンに関する協定」を平成24年3月に締結しており、より円滑な実施を進めている。しかし、本研究科の学生のインターン先は学校だけでは

なく、自治体の教育関連機関、各種施設、企業、海外の教育現場など多様である。インターン先への協力依頼等円滑にする工夫を進めていくことが必要である。ただし、教育インターンは教育実習のような同一の決められた体験を求めるものではない。あくまで「教育現場や社会の現実に対応して変革を提案しうる実践力・創造力を養い、新しい教育のあり方や方法を研究開発していく」ための優れた創造的な取り組みである。したがって教育インターンに取り組む学生が受動的ではなく、能動的・主体的に取り組むことによって初めて効果が期待できるものである。大学サイドとしては、この点を学生に十分理解させる必要があるだろう。

今回のアンケート調査では、教育インターン終了後の満足感や有用感などの把握を中心にした。教育インターンそのものが学生の進路選択や学校やその他勤務先でのキャリア形成等にどのように影響を及ぼしていくのかについても調査を実施していく必要があるだろう。本研究科の存在意義にも関わって、今後取り組んでいくべき大きな課題である。

（文責：米澤）

注

- (1) 「教育デザインノート」は提出書類 No.1～5 の総称で、学生は記入した書類を web 上で提出するシステムとなっている。「教育デザイン」と「教育インターン」の関連を図りながら研究活動が進められるよう構成されている。
- (2) 平成 23 年度の M1 学生を対象としたアンケート調査の詳細については、米澤利明「必修科目『教育インターン』実施報告」横浜国立大学教育人間科学部教育デザイン研究会『教育デザイン研究第3号』、2012, pp.90-99. を参照のこと。

引用文献

秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学〔編〕（2005）『教育研究のメソドロジー—学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版協会